



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

『論語と算盤』(洪沢栄一著)を読んで

— その生き方に、日本経済再生の鍵がある —

久米秀俊

本会主催の第六十六回全国学生青年合宿教室《主会場》は、コロナウイルス感染症拡大の影響で僅か二日の日帰りではあったが、八月二十八日(土)、招聘講師に評論家・江崎道朗先生をお迎えして、東京都渋谷区のオリンピック記念青少年総合センターで開催された。先人の歩みに思ひを馳せつつ「日本人としての生き方やわが国のあり方」などを学んだ。本号の二頁から五頁に、《関西会場》と併せて、研修の様子が記載されてゐるので、お読み願ひたい。

さて、令和六年から使用される「洪沢栄一」肖像の新二万円印刷が、九月一日から始まった。そこで新紙幣の「顔」である洪沢栄一について思ふところを少し述べて見たい。

天保十二年(一八四〇)、藍玉あまたま(染料)づくりの農家の嫡男として、武蔵国血洗島村(深谷市の一部)に生れた洪

沢栄一は、外国船の来航といふ時代状況の中で、国事(尊皇攘夷の思想)に目覚めて儒学や剣術を学んで江戸に出る。やがて橋慶喜(のちの十五代将軍)の家臣に取り立てられる。慶応三年(一八六七)には、パリの万国博覧会に徳川將軍の名代として赴く徳川昭武の随員に加はつて渡仏し、欧州の科学技術や産業の発展状況を目の当りにする。

日曜日のNHK大河ドラマ「青天を衝く」では、激動する時代の中で懸命に生きる洪沢の姿が演じられてをり、毎週楽しみに視聴してゐる。

さうした中で、農家に生れて、そして国事に目覚めた洪沢が、明治維新後、なぜ実業家を志したのかといふ素朴な疑問を覚えた。そこで主著のひとつである『論語と算盤』を繙いてみた。これは大正五年、七十六歳の時の著作である。

この書には、明治六年、三十三歳

の時に明治政府大蔵省総務局長の要職を辞して実業界に転じた理由、日本の名立たる企業五百社以上を設立して経営に携つた経験、『論語』や『孟子』の言葉に学んで得た信条などが数々のエピソードとともに記されている。「欧米諸邦が当時のことき隆昌を致したのは、全く商工業の発達している所以である。日本も現状のままを維持するだけでは、いつの日か彼らと比肩し得るの時代が来ようか。国家のために商工業の発展を図りたい、という考えが起つて、ここに初めて実業界の人になろうと決心がついた」と立志の時を振り返つてゐる。パリで株式会社の仕組みを知り鉄道を見た経験が、官職を擲つて商工業発展に努めることを決心させたのである。幕末、世のためにと考へ詰めて横浜の外国人居留地

焼き討ちまで計画したといふ若き日の氣概に通じるものが感ぜられる。実業に取り組む上での信条について、著書には、孔子の「仁者は己れ立たんと欲してまつ人を立て、己れ達せんと欲してまつ人を達す」の言を引いて「君子人の行いの順序は、かくあるべきもの」と記されてゐる。己れよりの人のことにまつ心を働かせることを大切にしたのである。また「国産奨励」に努めて、外国の産品を用ゐる場合も、厳選した小麦、綿花を輸入して我が国に適する麦酒業、紡績業

を起したといふ。「国産奨励」にこだはることで、人々への裨益を大きくして、ひいては日本のものづくりや事業の品質向上につなげたいと考へたのではないか。さらに会社経営のみならず、経済団体の活動、各種福祉・医療事業、インフラ整備、教育活動、関東大震災後の復興支援などにも尽力してゐる。

近年、ものづくりや経済活動の分野で、日本の地盤沈下が指摘されてゐる。欧米諸国に負けない商工業の発展を願つた洪沢栄一の生き方の中に、日本経済再生の鍵があるのではないかと思ふのである。

来る十一月二十一日(日)には、葛西敬之先生(東海旅客鉄道株式会社名誉会長)をお迎えして第三十三回国民文化講座が開催される(本号の折込みに詳細を記載)。先生は平成十九年の講座に続く二度目のご出講だが、その際、「JR東海の帽章は、桐に動輪が乗つてゐる国鉄時代そのままのデザインである。国を支へてきた日本国有鉄道の使命を忘れないやうにと考へたからである」旨を述べられた。国家のために尽した洪沢栄一の志とも通底するものがあると思ふ。さらに十一月のご講演では、歴史的な視点から国の進路、日本人としての生き方が語られることと思はれる。皆様のご参加をお待ちしてゐる。(一般社団法人日本港運協会)